明治期の西洋音楽受容におけるマンドリンの利便性

貝田 かなえ （関西学院大学）

マンドリンはイタリア発祥の小型の撥弦楽器である。本発表は、この楽器が体格の差や音楽経験を問わず、容易に弾ける「便利」な楽器として当時の日本で受容されたことを、西洋音楽受容の創成期に立ち戻って明らかにするものである。

学校の部活動および音楽教育家の比留間賢八（1867–1936）の活動によって、マンドリン奏者は大正期に急増した。明治期にマンドリンが西欧から流入して間も無く、学生による合奏団が組織され、今日の日本においても、主に課外活動を通して学生に合奏形式で受容される形態は変わっていない。マンドリンは日本に広く深く根付いた楽器だが、先行研究では楽器構造や演奏会記録、演奏団体の歴史が整理されるに留まり、日本の特異なマンドリン受容の実態については語られてこなかった。本発表によって、マンドリンの特殊な受容形態が明らかになることで明治期の西洋音楽受容の中で何が重要視されたのかが表れ、日本の西洋音楽受容に新たな視点を提示することができるだろう。

では実際に、マンドリンは日本でいかなる楽器として取り入れられたのだろうか。これを明らかにするために、日本人で初めて公の場でマンドリンを演奏した四竈訥治(1854–1928)と、彼が発刊した『音樂雑誌』に注目する。本雑誌は日本で最初の音楽専門雑誌として知られ、西洋の音楽状況や音楽会の記録、新楽器の紹介などが掲載されている。明治 25（1892）年の第 27 号では、四竈が発明した「僊華琴」という新しい楽器が紹介されており、この楽器がヴァイオリンやマンドリンと同じ調弦の撥弦楽器であること、合奏できること、「軽便」と評価されていることがわかる。そして、明治 27（1894）年の第 46 号において初めてマンドリンが紹介された際にも僊華琴と同様に「至極便利の楽器」と紹介されている。

同時期に普及したピアノやオルガンは持ち運べず、また西洋の音階に馴染みのなかった当時の日本人にとって、ヴァイオリンなどのフレットがない弦楽器で正確な音程を取るのは難しかった。これらの事情から当該時代の「便利」という言葉は、持ち運びが容易であることや演奏するのに大層な準備がかからず音程を取るのが容易なことを表していたと考えられる。また、『音樂雑誌』の記事では、西洋楽器を重視する一方で高価故に入手が難しいと記されているため、国内の西洋楽器普及において、安価であることや国内生産が可能であることも重要だったとわかる。比留間は共益商社および鈴木政吉（1859–1944）と協力して国産マンドリンを製作し、明治 37（1904）年に販売を始めると、人びとはより安価に入手できるようになったのである。

マンドリンが「便利な」楽器として明治期に普及したという見解は、これまで語られてこなかった。そこで、実際の資料をもってこの説を立証することに意義を感じ、マンドリンが唯一無二の楽器であったことを主張する。